

デジタル・テクノロジーの死

Don DeLillo, *The Silence* が描くバベルの塔の崩壊

平川 和

1. はじめに

Don DeLillo が 2020 年に上梓した *The Silence* は、2022 年 2 月のスーパーボウルサンデーに起きた出来事を描いている。この日、老夫婦のマックスとダイアンは、ニューヨーク・マンハッタンにある自宅アパートに、ダイアンの元教え子であるマーティンと、旧知の仲であるジムとテッサ夫妻を招いて、プロアメリカンフットボールの全米一決定戦であるスーパーボウルをテレビ観戦するはずだった。しかし、試合直前、突如として原因不明の大停電が世界を襲い、試合の観戦はおろか、一切の通信機器の使用が不可能となる。そして、これにより登場人物たちのコミュニケーションがいかにデジタル・テクノロジーに依存していたか、その脆弱性が露わとなる。本稿では、大停電による「デジタル・テクノロジーの死」がもたらした「言語の限界」を分析しつつ、これまでの DeLillo 研究ではほとんど扱われることのなかった「不眠症」のモチーフに焦点を当てることで『沈黙』の果てに何が見えてくるのかを明らかにしたい。

2. 自動化された対話

大停電が発生する直前、ジムとテッサはニューヨークへ向かう飛行機に搭乗中だった。機内で寝つけないジムは眼前のスクリーンに釘付けになっている。彼は単にスクリーンを眺めているだけでなく、そこに表示された言葉と数字から成るデータを無為に読み上げていくが、彼のこの発話が隣に座っている妻テッサとの対話の内容までも規定していく。ジムが読み上げる情報に対し、テッサは外気温の尺度として用いられている“Celsius”という言葉に反応し、そこから夫婦の会話は気温の別の尺度である“Fahrenheit”や「速度」を意味するフランス語 *vitesse* へと言及が拡がっていく。このような夫婦の会話が飛行機旅行に特有のものとして提示されていることを鑑みれば、彼らの会話が話者の主体性によって生じてくるのではなく、飛行機という移動メディアの特性や機内のデジタルデバイスからの刺激を受けて自動生成されていることが示唆されている。つまり、自動化された夫婦の会話は、人間のコミュニケーションが高い度合いでメディアやテクノロジーに依存していることを示唆しているのだ。

3. デジタル・テクノロジーの亡霊

スーパーボウル開始直前に突如として大停電が発生するが、この停電はすぐさま登場人物たちに文字通りの「沈黙」をもたらすわけではなく、まずは停電の謎をめぐる彼らの対話が繰り返されられていく。ここで興味深いのは、あらゆるメディアへの接続を断ち切られてもなお、彼らの発話がメディア的言説を動力としていることだ。例えば、マックスは試合中継が途絶えて何も映らなくなったスクリーンに熱視線を送りながら、あたかも本当に観戦しているかのように架空の試合実況に耽る（のみならず、実況の合間の CM までも完全に再現してしまう）。このようにマックスは、大停電によりあらゆるメディアやテクノロジーがシャットダウンしてもなお、架空の実況によってメディア的言説を再生産し続けるのだが、そのような言説を再生産しているのはマックスだけではない。マーティンは大停電の原因について「中国がアルゴリズムを操作して意図的に大停電を引き起こした」というもっともらしい仮説を披瀝する。しかし、彼の持論は陰謀論めいた根拠のないインターネット的言説と大差ない。一方でマーティンは“*I'm talking too much*” “*I'm grinding out theories and speculations*” という反省の弁も述べているが、ここで注目すべきは彼が使っている“*grind out*”という言葉だ。この言葉には「機械的に次から次へと生み出す」という意味がある。つまり、インターネット的言説などを次から次へと吐き出すマーティンは、自身がハルシネーションばかりを引き起こすチャットボットと化していることに少なからず自意識的なのである。マックスの実況中継やマーティンのチャットボット化が顕著に示しているように、停電後の脱デジタル世界においても、登場人物たちの意識あるいは無意識はデジタル・テクノロジーの亡霊に取り憑かれたままであり、もはや彼ら自身がオフラインでも自動的にメディア的言説を再生産しつづけるメディアそのものと化していると言っても過言ではない。

4. Babel から babble へ

物語が後半に入っても一向に電力が復旧する兆しはなく、自動化されていた彼らの発話は一貫性を失うと同時に断片化が進み、バベル塔の崩壊よろしく対話空間の崩壊が始まる。登場人物たちの発話は意思疎通の機能を失

った“babbling” (S71) と化していくのである。「たわごと」を意味する“babbling”という言葉はもともと「幼児が発する意味のない音声」のことを指す。Jiena Sun は、原因不明の大停電に狼狽える *Silence* の登場人物たちを「離乳したばかりの幼児」(964) に喩えているが、Sun の議論を敷衍するならば登場人物たちの言語もまた幼児化していると化していると言える。というのも、これまでテクノロジーに依存することで成立していた彼らの有機的な言語コミュニケーションは、謎の大停電という分節化不可能な事象を目の前にして、意味のない音声の漂い、あるいはシニフィエなきシニフィアンの戯れと化してしまっているからだ。しかし、DeLillo 文学において言語の幼児化は必ずしもネガティブなこととは限らない。というのも、DeLillo は幼児の babbling にある種の神秘性を感じており、そのような言語のやりとりに「計り知れない喜び」を見出しているからである。Julia Kristeva の詩的言語論によれば、無意味な幼児言語がもたらす口唇的快樂は、意味よりも言葉の音やリズムと戯れる詩的テキストがもたらす快樂に通底するものがあるという。そして、DeLillo も Adam Begley とのインタビューの中で、言葉の意味よりも音やリズムを重視して創作に取り組んでいると明言している。このように DeLillo が詩的言語に並々ならぬ関心を抱いていることを鑑みれば、テッサが詩人を生業にしていることは少なからず重要な意味を帯びるだろう。テッサは停電による不安で眠れぬ夜を過ごしながらも、頭の中では次の日に書こうと決めている詩の書き出しの1行が踊り跳ねているのを視ている。一方でテッサが心の眼で捉えた“*In a tumbling void*” (S96) という詩行は、必ずしも大停電がもたらした不安を払拭するような精彩に満ちた言葉とは言い難い。しかし、この何かもが汲み尽くされてしまった「空虚」な世界こそが、逆説的に創作の源泉となりうることを最後に明らかにしたい。

5. イメージを待ちながら

ラストシーンにおいてマックスは他者の言葉に耳を傾けることもやめ、ただじっと座りながら空白のスクリーンに目を凝らしており、空虚さと沈黙だけがその場を支配したまま物語は幕を閉じる。ついに電力が復旧することはなく、ここから何か新しいものが生まれてくる可能性は期待できないように思われる。この不毛な結末は Samuel Beckett の不条理劇を彷彿とさせるが、DeLillo は Beckett を“*master of language*”と称しており、彼が Beckett から少なからぬ影響を受けているのは明らかだ。とりわけ DeLillo の後期作品では、Beckett 流の「沈黙の美学」を追求するかのごとく、文体が切り詰められ、やせ細っていることを多くの批評家が指摘している。このことは *Silence* においても例外ではない。そこで結論では、あらゆる可能性が干上がってしまった *Silence* の最終場面を、Gilles Deleuze の Beckett 論『消尽したもの』を援用することで読み解いていきたい。「消尽したもの」とは、あらゆる可能性が尽き果てたもののことを言う。ドゥルーズは、「疲労すること」と「消尽すること」の間には決定的な差異があると述べます。単に疲労しているものは、まだ眠る可能性が残されている。しかし、「消尽したもの」にはもはや眠る可能性すら残されていないため、消尽したものは不眠症に陥る。*Silence* では、大停電による混乱と不安が人々の間に「集団的不眠症」を引き起こしている様が描かれているが、マックスも物語中に眠ることはない。とりわけ、最終場面において、眠ることもできず、他に何をやるわけでもなく、ただじっと座ってスクリーンを見つめるマックスの姿は、Beckett 作品に登場する人物の姿と重なる。両者はともに言語を消尽させ、沈黙の中へと自らを後退させているように見える、Deleuze は言語が限界を迎え、沈黙が生じた先にイメージが立ち現れると言う。また、宇野邦一が指摘するように、イメージの幻出と散逸を繰り返す「消尽は決して閉じられることがなく、開かれたプロセス」(115) なのだ。この消尽の果てに現れては消えるイメージこそが作家 DeLillo の創作の源泉となり得るものなのではないだろうか。DeLillo は *Silence* の創作に際し、物語や登場人物の具体的な構想よりも前に、頭の中に視えたイメージから作品を書き始めると述べている。また、作中のテッサのように、DeLillo はまず視覚的に言葉を捉えようとする作家なのである。だとすれば、『沈黙』の果てに空白のスクリーンを見つめるマックスの消尽した姿もまた、心のスクリーンにかすかに現れるイメージを待ち続ける作家本人の姿と重なるのではないだろうか。このように *Silence* は、テクノロジーの破局とともに崩壊していく言語の有様を描きつつも、その先に漂うイメージによって受胎告知される新たな物語の可能性をメタフィクショナルな形で提示しているのだ。

引用文献

DeLillo, Don. *The Silence*. Scribner, 2020. [S]

Sun, Jiena. “‘The Human Slivers of a Civilization’: Language Events in Don DeLillo’s *The Silence*.” *English Studies*, vol. 103, no. 6, 2022, pp. 961-982, <https://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/0013838X.2022.2108650>. Accessed 9 Dec. 2023.

宇野邦一「イメージからイメージへ」ジル・ドゥルーズ、サミュエル・ベケット『消尽したもの』宇野邦一・高橋康也訳、白水社、1994年。97-116頁。